エミリー・ブロンテと自然

堀出　稔

Emily Brontë and Nature

Minoru HORIDE

エミリー・ブロンテの作品には，常に自然の風景がある．それは時には荒々しい原野を駆け抜ける風であったり，春先きに咲く可憐なクロッカスの花であったりする．これらの自然の描写は，そのまま作者エミリーの心象風景のように思える．彼女の小説・詩を通して，そうした自然描写が読む人の心を捉え，ついにはその小説・詩が訴えようとする核心にその人を導く．この事は，エミリーにとって自然が切っても切り離すことのできない存在であったと言えよう．事実，エミリーの故郷ハワースはイングランド北部ヨークシャーにあり，その村の周辺ははるか彼方まで荒野が連らなっている．まるでそこに取り残された孤島のように，ハワースは荒野の海の彼方にあり，19世紀初頭においては現在からは想像もつかない隔絶した土地であったであろう．エミリーはその土地からほとんど離れることなく，そこで生涯を送り，現代に通じる作品を残したのである．この小論においては，エミリーが自然をどのように描いたかを，小説 *Wuthering Heights* 及び詩集 *The Complete Poems of Emily Jane Brontë* から言葉を抽出して分析し，考察してみる．第一課題は *Wuthering Heights* に描かれた自然，第二課題においては，*The Complete Poems of Emily Jane Brontë* に描かれた自然を分析する．そして第一課題・第二課題から作者の自然観を導いてみたい．

第一課題の *Wuthering Heights* における自然描写は，この小説の各場面に無数にあるが，ここでは5つの場面を選んで引用してみる．まずこの小説の始まりの部分，キャサリンの夢についてである．聞きたくないという召使いネリーに，無理に彼女の見た夢を話す．

If I were in heaven, Nelly, I should be extremely miserable[1].

この言葉に対してネリーは，

All sinners would be miserable in heaven[2].

と言ってまるで相手にしない．ネリーは熱心なキリスト教徒であり，善人は天国へ，悪人は地獄へという考えに固執する．キャサリンにとって天国は，my home[3]即ち彼女の安息の地ではなく，the earth[4]で表現されるようにヒースの花の咲く荒野こそ，彼女のやすらぎを見い出す場であった．次の場面はキャサリンが病床に就き，精神錯乱状態に陥った時である．彼女は寝台の上に置いてある枕の中に入っている様々な鳥の羽根を取り出して，種類別に並べる．だがハトの羽根を見つけると，それを床に投げ捨ててしまう．彼女にとってヒースの花の咲く荒野を思い出させてくれる鳥は，lapwing[5]即ちたげりという鳥であった．その鳥の羽根を見ると，ヒースクリフと荒野でその鳥を探しに行った少女時代を思い出すことができた．そしてその頃，ヒースクリフにたげりを絶対殺してはいけないと約束させ，彼もまたキャサリンに従順であった．

偶然枕の中に入っていたたげりの羽根が，キャサリンとヒースクリフの二人だけの荒野での生活を彼女に思い起こさせることになった．次はキャサリンの死期が近づいた頃の場面である．彼女は夫エドガがすでに死を予感するような言葉を述べ，彼を苦しめる．彼女が春の終らないうちに死んでしまうと言う．彼女の墓は教会堂のリントン家の墓ではなく，the open air[6]にある荒野と地続きの場所に作ってもらうよう頼む．そしてほんの少しではあるが病気が回復に向った時期があった．それは翌年の三月であり，妻の病気回復に喜んだエドガは早先きのクロッカスを枕辺に置く．この花もまた荒野への思い出を駆り立てる要因なのだ．キャサリンが死に，埋葬されることになる．村人達の驚きをよそに，教会堂の庭の隅の傾斜した草地に埋められることになった．教会堂を囲む壁がその場所だけ底いため，ヒースやこけももが壁を伝って這い上がり，死んだキャサリンと荒野とが一緒に結ばれることになった．この事は，生前キャサリンが望んでいることであった．前述の5つの場面には荒野に関する植物，動物がかなり表現されている．その植物の中でも最も典型的なのは，ヒース (heath) という植物である．ヒースには次のように二つの意味がある．

1．an open piece of wild unformed land where grass and other plants grow.

2．any of several kinds of bushes with small flowers[7].

一つは荒野 (moor) と同意語であり，エミリーの作品にどちらも登場する．もう一つが白，紫，淡紅色の小さな花を付けるかん木である．heath という言葉の付いた植物には，heathbell, heathberry, heathbird, heath grass などがある．エミリーの育ったハワースはヒース及びヒースに育つそれらの植物に囲まれている．しかも *Wuthering Heights* には，ここに引用した植物以外に多数登場する．例えば，召使いのネリーがキャサリンとエドガとの結婚を植物に喩えて述べている．

> It was not the thorn bending to the honeysuckles, but the honeysuckles embracing the thorn[8].

このように，キャサリンの激しい性格とエドガの穏やかな生活が窺われる．またキャサリン・リントンとリントン・ヒースクリフの性格も自然描写から判断することができる．

> He said the pleasantest manner of spending a hot July was lying from morning till evening on a bank of heath in the middle of the moors, with the bees humming dreamily about among the bloom, and the larks singing high up over head, and the blue sky and bright sun shining steadily and cloudlessly. That was his most perfect idea of heaven's happiness[9].

リントン・ヒースクリフの自然に対する関心は，bee, lark, dreamily といった言葉にみられるように，比較的穏やかな自然原象に向けられている．これに対してキャサリン・リントンは次のように述べている．

> Mine was rocking in a rustling green tree, with a west wind blowing, and bright, white clouds flitting rapidly above ; and not only larks, but throstles, and blackbirds, and linnets, and cuckoos pouring out music on every side,…[10]

キャサリン・リントンの自然に対する関心は，rustling green, clouds flitting rapidly above, cuckoo pouring out music といった生々とした動的な自然に向けられる．性格を対照させると，リントン・ヒースクリフは ecstacy of peace[11]を求める性格である一方，キャサリン・リントンは a glorious jubilee[12]を求める性格なのである．さて *Wuthering Heights* の5つの文の引用に戻ると，それらいずれもキャサリンの心は荒野に集中している．5つの引用文から判断

しても，彼女はどれだけ荒野を愛していたかが推測することができる．しかもその荒野への愛は，常に少女時代に過したヒースクリフとの思い出に向っている．彼女はリントン家に嫁ぎ，リントン夫人になってもなお荒野での思い出を忘れることはなかった．それどころか彼女の死期が近づけば近づく程，ヒースクリフと過した荒野の世界を恋焦れる．しかし実際はその世界を取り戻すことは不可能なのである．それ故に彼女は，死期が近づくに従って生と死を越えることのできる永遠の世界のような何かを，心から待ち望むようだ．

次に第二課題に移り，エミリー・ブロンテの *The Complete Poems of Emily Jane Brontë* の中に現われた自然について考察してみる．彼女の詩集において自然がどのように描かれているかを知るために，植物及び大気内の自然原象と事物に分類して分析する．最初は植物である．エミリーの詩集に現われた植物はそれほど多くはない．しかも具体的に植物の名前が書れているのは少なく，*The Bluebell, To a Bluebell, To the Bluebell, Mayflowers are opening* で始まる題名のない詩，*Love and Friendship* といった5つの詩に限られるようである．これら5つの詩は中心課題が花そのものに向けられている．その他の詩においても植物は描かれるが，作者が何かの中心課題を持ち，それを訴えようとする時の情景描写の役割を果しているように思われる．したがって具体的な花の名前が重要な要素を占めるのではなく，その花に付けられた形容詞及び形容詞相当語句が作者の心象をかなり適確に表現している場合があるように思われる．そこでエミリーの詩集から具体的に植物の名前及びその関連した語，作品に描かれた頻度数，植物の名前及びその関連した語に付く形容詞，形容詞相当語句は次のようである．[13)]

植物の名前及び関連語		使用頻度	植物の名前及び関連語に付く形容詞及び形容詞相当語句
(1)	flower, flowers	30	golden, fragrant, blowing
(2)	grass, tarf, sod	21	bright, green, golden
(3)	tree	15	waving, spectral, dark
(4)	field, wood, forest	13	golden summer's flowery, thick
(5)	heath, heather, heathy	12	waving, purple, dark
(6)	moor, moorland	11	wild, bleak, drear
(7)	rose	10	wild, bright, clustering
(8)	leaf, foliage	7	green, fresh, lustre
(9)	bluebell	6	
(10)	その他 primrose	1	pale
	violet	1	purple
	asphodel	1	
	hawthorn	1	

以上の分析の結果最も多く使用された植物に関する語は，flower と flowers であるが，これらの語に付く形容詞はほとんどが春の息吹きを感じさせるものが多い．次に heath と moor については，heath には春の季節を感じさせるものと dark, pale といった冬の荒涼とした感じを表現したものとが半々であるのに対して，moor にはほとんど陰鬱な形容詞が用いられている．tree も heath と同じく，明るさを表現した形容詞が同程度である．しかし暗さを表現した形容詞には，spectral とか他に gnarled, lonely といった *Wuthering Heights* の最初に描かれている木々の様子と共通する暗さが見られる．field と wood に付く形容詞は，grass に付く形容詞と同様 green が多い．バラとバラの関連した語は，ほとんどが形容詞と複合形容詞として使用し

ている．冬を連想させる一部の形容詞を除いて，エミリーの詩に現われた植物に付く形容詞は春夏を思わせるものが多い．秋については，Autumn's leaves という言葉が見られるだけのようだ．少なくともこれらの植物に付く形容詞から判断して，作者エミリー・ブロンテにとって春夏という季節としてその時に咲く花々，芽を吹く草木といったものが生命の息吹きを感じさせるものであっただろう．しかし moor のあらゆる植物が枯れ果てるのは晩秋から冬にかけてであり，エミリーの使った形容詞は bleak, wild, dreary である．このように冬に対しては春に感じた生命の息吹きとは逆に，苦悩，死をそれらの形容詞から感じとれる．秋の豊かな情景というものがあまり表現されず，春夏という歓喜に満ちた季節と冬の陰鬱な情景とを極端に使いわけていることは，*Wuthering Heights* においても同様である．ヒースクリフが再び帰って来てキャサリンの心を苦悩させるのは，夏も終り秋になろうとする頃であり，その後彼女は病床に就き，冬の荒涼とした中で春を待ち望む．しかし病気の一時的回復は春であり，エドガの持って来た金色に輝くクロッカスに生命感を見る．では歓喜に満ちた春，花，草木は，エミリーにとって何を意味していたのであろうか．ただ単に美しく，生命を感じさせるものだけであろうか．ここで再び植物に付けられた形容詞について考えてみたい．花，草木に付けられた主な形容詞は，fresh, bright, golden, green, young などである．いづれも心を明るく掻き立ててくれる形容詞である．だが栄光に満ちたといった意味の glorious という言葉は使われていない．この言葉はむしろ the glorious sky, the glorious wind といった大気に使われているようである．この事は何かエミリーの心象を知る上で意味深いもののように思われる．エミリーの詩集の中からここに花に心を寄せた3つの詩を選んでエミリーの心象風景を考えてみる．*To the Blue-Bell,* この詩は可憐に咲くブルーベルの花を見，生きる慰めとしている．*To a Blue-Bell* においても同様，限りある人生であっても花に心を向け，生きる力を得ようとする．しかしブルーベルへの共感と心のやすらぎはそう長く続きはしない．Love and Friendship という詩においては，はかない恋の想いを荒野に咲く一輪のバラに心寄せて書いている．これに対して緑のヒイラギの常に力強い様子を友情に喩えている．これら三つの詩から判断して，エミリーは地上の花，特にブルーベルに慰みを見い出したがやがてそのはかなさを知る．はかない恋心を *Love and Friendship* の中で語り，自分の魂をもっと力強くすべて委ねることのできる何かを求めようとする．しかし地上の生に限界がある．その限界に気付いた時，それを越えようとする意識が永遠あるいは絶対的ものに自分の運命を委ね，信じきって，恐れることなく懸命に生きようとするようである．では作者エミリーは一体どのようにしてその永遠なる何かに近づくことが可能であったのだろうか．ここで第二課題の二番目の自然の大気の現象及び事物の分析をしてみる．なぜならそれらが彼女にとって永遠なる存在を知覚できる環境の一つであったように思われるからである．自然の大気の現象及び事物についても独特の表現がみられる．

大気の現象及び事物	使用頻度数	大気の現象及び事物につく形容詞，形容詞相当語句
(1) sky	35	glorious, silver, solemn
(2) wind	35	fresh, free, glorious
(3) heaven	34	Mighty, expand, gracious
(4) sun	33	golden, radient, heaven's
(5) star	14	glorious, silvery, bright
(6) air	13	softened, kind, vacant

(7) moon　　10　solemn, soft, radiant

このようにエミリーは，自然の大気の現象及び事物にも様々な表現を駆使している．彼女は自然に没入し，地上のあらゆる諸相を統括する何か絶対的存在の啓示を待ち望んでいるようだ．その場合，大気の現象及び事物が持つ特性即ち太陽や月の輝き，その輝きを伝える空や風といった現象が啓示を受ける条件になっていると言える．詩集の中には，glory, glorious といった言葉が数多く見られる．これは地上の植物に付けた形容詞とは対照的である．glory, glorious といった言葉が，神の栄光，天上の栄光を表現していることから判断して，エミリーにとって大気の現象及び事物が，直観的啓示に至る重要な要素を示しているのではなかろうか．

さてこの小論の第一課題において *Wuthering Heights* に描写された自然，第二課題では *The Complete Poems of Emily Jane Brontë* に描かれた自然について分析した．これら二つの課題から，エミリー・ブロンテと自然というテーマを結論づけてみたい．*Wuthering Heights* において作者はキャサリンの意識を通して，常に彼女の行きたい所は荒野であった．そこにおいては社会の因襲の束縛もなく，解き放れた自由を享受することができた．それはまるでキャサリンとヒースクリフにとっては，エデンの園であったと言える．作者は詩集においても空想物語は別にして，荒野以外の世界を描くことはあまりなく．実生活においても荒野の自然は彼女にとって最も大切な場所であったと思われる．彼女にとって荒野は散歩と思索のためばかりではなく，詩的想像の世界に魂を飛翔させることができる場所ではあったようである．

Notes

1) Brontë, Emily : *Wuthering Heights,* 72, W. W. Norton & Company. INC (1963)
2) Ibid., 72
3) Ibid., 72
4) Ibid., 72
5) Ibid., 105
6) Ibid., 109
7) Procter, Paul : *Longman Dictionary of Contemporary English,* 524, Longman (1978)
8) Brontë, Emily : *Wuthering Heights,* 81, W. W. Norton & Company.INC (1963)
9) Ibid., 198
10) Ibid., 198
11) Ibid., 199
12) Ibid., 199
13) *The Complete Poems of Emily Jane Brontë* (Edited by C. W. Hatfield, Columbia University Press (1967) に現われる植物とそれにつく形容詞，形容相当語句をすべて拾い出し，作者の心象を分析した．
14) *The Complete Poems of Emily Jane Brontë* (Edited by C. W. Hatfield, Columbia Univrrsity Press, (1967) に現われる大気の現象及び事物それに付く形容詞，形容詞相当句をすべて拾い出し，作者の心象を分析した．